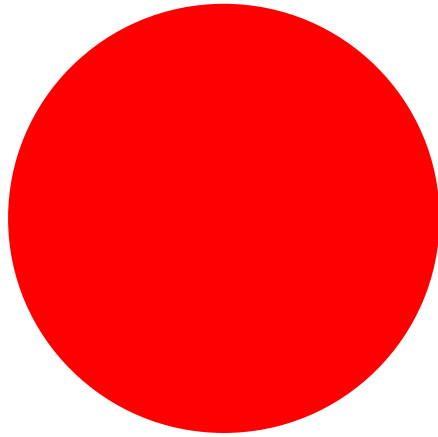




明けてまして
お芽出とうづぐぐいします



令和二年庚子
ひの心を継ぐ会
会長 三浦 夏南
事務局 一同

第 22 号
月 1 回 発行
ひの心を継ぐ会
〒799-1336
住所:愛媛県西条市
上市甲 720-1

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一あしは(4)

——光の発生と素粒子

——原子の週期率と八価元素——

この号から「始めなき始」に入るつもりでいたが、ここで一筆加えておきたいので
予定を変えた。

冬至、北に陰極まりて一陽兆すと言うことは、虚空真空の中に光子エネルギー生
ずと言うことでもある。静極まって動に移ることであり、収縮終つて膨張に転ずる
ことであり、宇宙の大生命の「呼」から「吸」への息(生氣)の波動である。

宇宙は生命なるが故に波動をもつ。波動的エネルギーは漸次高められて、高エネ
ルギー光子となる。かくして人間の認識の対象となる。一つは、光輝状の放射体と
して、光、熱、霊波、エキス光線等であり、一つは、物質そのものとして。

光輝状エネルギー(光子エネルギー)と物質とは別物ではなく、同一体の二側面
である。物質は、エネルギーの総量がマスとして計算され、光輝状の放射体は、一
秒間の波動数がマスとして計算される。陰電子一個のマスに匹敵する波動数は、
一の下に二十の〇を付けた数字である。これがガンマー線という高エネルギー光子
で、エネルギーの一単位量が一對ないし数対の電子及び陰電子という形態で物質
に転化したのである。

このように、充分なる波動を發揮したガンマー線は、之を陰電子と陽電子とに転化し(之を対創性という)、又、陰電子と陽電子が結合すれば、物質は姿を消して、ガンマー線となる(之を対消滅という)。

宇宙エネルギーは波動をもち、それが高められて光を生ず(このことは、うましあしかびひこじのかみ宇麻斯阿志訶備比古遅神の作用、天照大御神の出生と相関係にある。)これエネルギーが物に転化し、宇宙が創造されていく「一」はこである。

現代幾多の素粒子が発見されている。しかし宇宙の深淵は究め難いのである。主なる素粒子とその質量を記しておく。

電子	中子	陽子	陽子	中子	中子	中子	光子
質量 1.008	1.0089	0.0006	0.0006	0.2	0.11	0に近い	0

注、これらの素粒子については、「ひ」の六〇号頃に掲載しているので参照されたい。

そして、また、ここに見るのは、波動エネルギーも、数霊の定則に於て、一の下に二十の〇を付けた波動数によってガンマー線として、光、熱を発し、物質として生じるのであり、素粒子達もそれぞれ質量の数霊が与えられて存在が許され、その性をもって働いているのである。

第二章 農の史的考察

第三節 時勢と農

菅原 兵治

天運循環

かく觀じ来れば、世態の推移は誠に往いて復らざるなき天運の循環である。(此の点吾々は易に於ける陰陽循環の理と合せ考えて、深き証悟と而して一種の予見的安心とを覚える。)而してかかる史眼を以て現代を直視する時、どうしても茲に時勢を翻然として再び正しき質に帰らしむべき「野人」「東夷」「田舎武士」の素樸にして強剛なる活力の注射を必要とすることを認めねばならぬ。然らば現代に於てこの帰質の強き活力の所有者は果して誰ぞ。私は此処に農村、農民の歴史的使命の最も重大なる所以を覚知するものである。従つて時勢挽回の原動力たるべき使命に覚醒せる農民——農士は、徒らに時流によって動かさることなく、毅然として猶興の心を抱き、独醒の志を存せねばならぬ。

来るべき改新

近来頻りに「昭和維新」という声を聴く。而して多くの人は其の指導規範として明治維新に之を求めんとしている様であるが、私は明治維新と来るべき第二維新とは、其の重要な諸点に於て相異なる處が存すると思う。現代の世相は幕府当時に於けるよりも、むしろ藤原氏末期に於ける中央の爛熟と、地方の武士勃興との時相、若しくは足利末期に於ける中央の暴力革命的闘争状態(応仁の乱)と、地方における群雄割拠の時相等に類似し、現下の時弊改新の新勢力は地方山澤の間に深く培われるべきものと思う。此の点に關し農村人の使命を明かならしむべく、日本農士学校趣旨の一節と、山澤健児の歌とを左に載録することとする。

日本農士学校趣旨

人間に取つて教育ほど大切なものはないことはいふまでもない。国家の運命も国民の教育の裡に存すると古人も説いている。真に人を救世を正すには、結局教育に須たねばならぬ。然るに教育も常に深省しないと風俗と共に頹廢の危険が多

い。由来なまなか文化が爛熟して、人間に燃える様な理想と之に伴う奮闘努力とが消滅し、低級な享楽と卑怯な苟安とを貪って、四の五の言う様になってしまふと、かかる階級は救済不可能なるを常とする。平安の公卿達も江戸の旗本御家人共もかくして滅んだ。匡房も嘆じ、吉宗も定信も焦ったが、終に如何とも出来なかつた。かかる時国家の新生命を発揚した者は必ず頽廢文化の中毒を受けずに純潔な生活と確乎たる信念とを持った質樸剛健な田舎武士である。今日も真底の道理には変化はない。この都会に群る学生が軽薄な学問をしていて何にならうか。国家の明日、人民の永福を考える人々は、是非とも活眼を地方農村に放つて、此処に信仰あり、哲学あり、詩情あつて、而して鋤鋤を手にしつゝ毅然として中央を睥睨し、周章せず、騒がず、身を修め、家を齊え、余力あらば先ずその町村からして小独立国家にしたてあげてゆこうという士豪や篤農や郷先生を造つてゆかねばならぬ。是れ真自治(面白く言えば新封建)主義とも謂うべき真の日本振興策である。

山澤健児の歌

- 一、渾沌死して幾年か 世は軽薄の都ぶり
 日々にあまねく蔓りて わが国民をみだるとき
 やまと心のやみがたく 起てり山野の益荒雄ら
- 二、わが世を永久に望月の 円けきものとひたすらに
 思い上げれる公卿輩を 鎧の袖の一ゆりに
 うち亡ぼせし鎌倉の 武士こそわれ等の相なれ
- 三、すめらぎの代の安けくば 身は花もりとなりけむを
 みことかしこみ大君の へにこそ死なめと争いて
 死せし維新の志士の後 進むぞわれ等の覚悟なる
- 四、いざなぎの神いざなみの 神の末なる我等いざ
 天の瓊矛をふりかざし 国の礎いやかため
 世界の民をさしまねく わが皇運を翼けなん

農村の使命と矜持

かくて茲に私共は、内展的 Involitional に造化の本質より考察するも、はた又外展的 Evolutional に世運推移の歴史より考察するも、「農」の深き意義と、高き価値と、而して重き使命とを痛感深悟するものである。従来農村生活の事を論ずる者にして、多くは泣寝入りの「あきらめ」の程度に止るものが多い。曰く現代は文明のおかげで、仮令農村に居つても書物も読める、新聞や雑誌も読める、講演も聴ける、ラジオも聴ける、活動写真も見れる——農村にいても文明文化の恩澤に浴することが出来るではないか、都会生活になど憧れずに農村の生活に満足せよと。農村に居て、都会の真似が出来——これでは畢竟「泣寝入り」的諦めたるに過ぎない。何処に農村生活の高らかな誇りと、深き悦楽とが存し得るか。新興日本農村の猶興の士は農村に居ることが吾等の「誇り」であらねばならぬ。然り、吾等農村に居ることが、吾等の新しき理想より、吾等の真理より、最も誇らしき歓喜であらねばならぬ。「農村に居ても」という泣寝入りの諦めは、断固として之を退けよ。そして「農村に居ることが」という誇りの上に屹然として立て！新興日本の源泉たる「山澤之雄」たる士風は此の間より始めて生れ出するものである。

農村の士よ、女々しきあきらめを捨てて雄々しき誇りの上に立て！而して今こそ雄々しき悟りと、雄々しき力と、雄々しき風懐とを有つべき秋ではないか。

「参考」この文質交替の歴史観に就いて思起すのは宋の邵康節が天津橋上に杜鵑の声を聞いて王安石の改革が天下を多事ならしめん事を予言したという話である。単に右の興味からのみ止まらず、現代支那の状態を考察するの一助ともなると思うので十八史略の中から抄録して記すこととする。

「邵雍(康節)客と天津橋上を散歩し、杜鵑の声を聞いて愁然樂しまず。客其の故を問う。雍曰く、洛陽もと杜鵑なし、今はじめて至る。天下將に治まらんとすれば地氣北より南し、將に乱れんとすれば南より北す。今南方の地氣至る。禽獸飛類は氣の先を得るものなり。二年ならずして、上南士を用いて相となし、多く南人を引いて専ら更変を務め天下これより多事ならんと。」

この中で私共の興味を有つのは「天下將に治まらんとすれば地氣北より南し、將に乱れんとすれば南より北す」の語である。一体支那を南北に分つて見れば、南方は「文」の地であり、北方は「質」の地である。故に右の邵康節の語は、換言すれば「質」が「文」を制すれば天下は治

まり、「文」が「質」を圧倒すれば天下が乱れるということになる。この見地を以て見れば、現下の支那の時局に於て亦一見解が立つてあろう。

暗黒より光明へ

三浦 夏南

今月の古事記勉強会では「黄泉の国の段」を勉強したのだが、そこで面白い質問を頂いた。神話、古代伝承によくある話で、見てはいけないと言われたものを我慢することが出来ず見てしまうとそこから不運が湧出するという展開がある。「黄泉の国の段」では「イザナギノミコトが黄泉の国へと向かわれたイザナミノミコトを追って行くと、黄泉の国から現世へと帰れるかどうか黄泉の国の神々に相談してみるので、しばらく待つてほしい。その間決してぞかないで下さい」とイザナミノミコトに言われる。しかし待ちかねたイザナギノミコトはその約束を破り灯りをともして照らしてみるとそこには恐ろしい姿に変わり果てたイザナミノミコトの姿があったのである。この展開は「鶴の恩返し」でもお馴染みのパターンであり、この後の古事記神話にも登場することになる。そこでどのような質問が出たのかということ、仮にイザナギノミコトが約束通り待つことが出来ていたとしたら、イザナギ、イザナミノミコトの大神は再び葦原の中つ国に帰還し、修理個成の神勅を継続していたのだろうかというものであった。

勉強会を進める上で解説書としている影山正治先生の『古事記精講』を紐解くと、我が国のツミ、ケガレという概念は他国の如く清浄に相対するものではないし、消極的のものでもないと言われている。それは光明をさらに輝かしめんが為の暗黒であり、生を進展させんがための死である。さらに言えば、光明、暗黒協力一致して万物を修理個成するものであるといわれている。天国と地獄を相対分離し、

天国を切望し、地獄を忌避することを以て現実を生きる意味とする異国の世界観と異なり、高天原、黄泉の国の光明と暗黒は陰陽相補いつつ葦原の中つ国を創造進化させ行くのである。イザナギノミコトが黄泉の国にて受けられたケガレは、ミコトの使命の再確認を強く促し、天照大御神の降臨へとつながる禊の神業が現出するのである。もしもイザナギノミコトが約束を守り、黄泉の国にてケガレを受けなかったのならば、天照大御神の生誕もなく宇宙の創造は進展することが出来ないのである。

斯くの如く神話を考えてみると、我が国の敗戦以来の国家的低迷と泥沼的現状も意味ある成り行きに見えて来る。明治の近代化以来西洋列強と渡り合ってきた我が国は発展のために置き去りにしなければならなかった伝統文化の価値から目を背けざるを得なかった。或は現象的な発展が根本本質を無視していることへの言い訳ともなっていたかもしれない。日清日露に続き、大東亜の戦いにも東亜の共栄を勝ち取るという大義を以て勝利を収めていたならば、世界随一の国家となっていたであろう。しかし、その時忘却すべからざる我が国の伝統、古道を以て世界に臨むべきであるという草莽有志の叫びは政府中枢に届き得たであろうか。表層的な国体論を背景とした近代国家日本は真の意味で世界の盟主とはなり得なかったのかもしれない。

イザナギノミコトが黄泉の国で受けたツミ、ケガレを自覚して禊の神業に赴かれたように、我々令和の民も明治に始まり、戦後に爆発した近代的諸問題を骨身にしてみても自覚反省することにより再出発することが出来る。明治以来の自治体の崩壊は、時代が変わったのだと無視することも出来ようが、核家族さえも成立せず都市の孤独なる個人となって、親の温かみも知らず、兄弟のぬくもりも感じられず育った不幸な人々が猟奇的事件を起こすに至って初めて事の重大さに震撼するのである。西洋技術の利便性に魅惑され、我が国伝統の職人技術が忘却されることには大した罪悪を感じなかった人々も機械とAIが人間を管理する時代を目前にしては深省せざるを得ない。すべてが極限まで行き詰まった今だからこそ、その始まりに帰り根底から我が国を禊祓う機会を与えられているのである。今必要とされることは現状の改善でも戦前への憧憬でもない、一切を捨てて原点に回歸し、新生の道に立つことである。

とよくも農園だより

三浦 美恵

皆様、あけましておめでとうございます。今年のとよくも農園は、借りていた畑の片付けから始まりました。三浦家が勤皇村構想の実現に向けて松山を発ったのが二年前。右も左も分からないまま、勧められて最初に借りた農地は、車を横づけすることが難しく、水も入らず、いびつな形で耕耘するのが不便な段々畑でした。勿論鍬や牛で耕していた頃は、畑の形は関係なく、山からの豊富な清水も流れていたはずで、さぞおいしいお米や野菜が育っていたことと思います。しかし広大な面積を管理していく上ではそれが仇となり、最近あまり手入れができていませんでした。夏の自然の力は想像以上に

恐ろしく、一、二カ月草刈りや耕耘を放棄すると、自分達の背丈ほどの雑草が畑を蔽います。そこで、しっかりと管理ができると判断した一部の畑を除いて、お借りしていた畑を返す準備をしてきました。雑草が生えていた畑は何度かトラクターで耕耘し、イノシシや鹿除けに張り巡らしていたワイヤーメッシュを除け、畦まで丁寧に草刈りをしていきました。こうして片付けをしていくと、少しずつ畑が蘇っていくようです。もう少し私達に余裕があれば、その土地の持主の御先祖様が大切にされていた土地を上手く活かして行けたのだと思うと残念ですが、ここ数年は管理がしやすい所から作付けして行きたいと思います。

今月は、里芋の収穫・出荷も行いました。昨年内に大半は掘っていた里芋ですが、まだ三畝ほど残っていました。手で収穫していると間に合わないため、畑が



乾いている晴れの続く日をねらって、知り合いの方に機械で掘り起こしてもらいました。親戚に何人も声を掛け、ストーブの周りで暖をとりながら、倉庫に高く積まれた里芋の根切りを行っていききました。少しずつ小さくなる里芋の山を背にして、今年の三浦家の抱負や方針を語りました。

さらに、この秋収穫予定の里芋の畑準備も行いました。土壌分析をしてもらい、堆肥やミネラルを施肥していきます。昨年は準備が遅れたため、土が湿ったまま畝立て・マルチ張りをすることになり、里芋の育ちや収穫に影響が出てしまいました。今年本格的に里芋を育てて行くため、早め早めの準備を心がけています。

その他に、ネギの収穫・出荷や、アスパラの手入れ、人参・ジャガイモ・大根・キャベツ・カブ・ブロッコリー等の有機で育てている冬野菜の収穫も行いました。就農した当初に描いていた理想とは違いますが、少しずつやり方や方針が定まって来て、畑も落ち着いてきています。今年時間は追われる農業ではなく、家族団欒の時間を増やして余裕を持った農業をしていきたいと考えています。昨年同様、本年もどうぞよろしく願います。



★活動報告

・一月八日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・一月二十二日(水) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★今後の予定

・二月十二日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・二月二十六日(水) 十九時～二十一時勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

- ・ 一般会員 三千元
- ・ 賛助会員 一万円
- ・ 特別賛助会員 三万円
- ・ 支援会員 一万円

